

国

語

(45分 100点) (解答番号

1

5

20

)

第一問 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(30点)

個人の生きかたよりも社会の目や社会の秩序が圧トウ的に重視される前近代にあっては、個人の生きかたのシ針は個人の外から個人のもとへとやってきた。自分の欲望や意志や周囲への不満を抑えて、外からやってくる規範を素直に受け入れて生きる人が、立派な人格者だった。そうした生きかたは、「礼」を重んじる生きかた、「世間体」<sup>(3)</sup>を重んじる生きかたとして、ことさらに顕彰された。たとえば、江戸時代に広く行きわたった儒教道徳は、そうした他律的な生きかたこそが善だと教えるものだった。<sup>(4)</sup>

近代の個人主義思想は、それへの反動として、外からやってくる規範に強く反発し、社会の目に抗<sup>(5)</sup>って生きることこそが自由で自立した生きかただと考える。ことに前近代と近代がはげしくせめぎあう過渡期にあっては、外からやってきて個人の自由を押しさえこもうとする社会の目は、封建的な目、退嬰的な目、反近代的な目として反発され、拒否された。社会の目に抗<sup>(6)</sup>って生きることが、そのまま自由に生きることだと考えられた。前近代と近代が真つ向からぶつかりあい、社会の目が古き前近代を体現するものと見なされるかぎり、近代的な新しさを求める自由な個人が、社会の目に強く反発したとしても不思議ではなかった。古い秩序や規範意識や価値意識を捨てて、未知の新しい世界に身を投じようとするのが、自由を手にした個人の基本的な姿<sup>(7)</sup>だった。

だが、古い秩序や封建的な目を否定し拒否するだけでは自由な生きかたは実現しない。古きもの、遅れたものを否定し拒否するとき、未知の新しさへと向かう自由が実感されるのはたしかだが、その自由は否定の色合いが強すぎて、新しい生きかたを生み出す積極的な内容を欠いている。自由を求める個人は、社会の目に抗いつつ、自分にふさわしい具体的な生きかたをどう構築したらいいのか。

社会の目に抗いつつ、抗ったその生きかたに具体的な内容を盛りこむには、社会の目にきちんと向き合うほかはない。それは、社会の目に素直に従うのとはちがう。抗う姿セイを保ちつつ、社会の目に背を向けるのではなく、それと正面から向き合うのだ。そのとき、社会の目は、単純に否定し去ることなどできないことが見えてくる。

(長谷川宏『高校生のための哲学入門』による)

問1 傍線番号(1)・(2)・(7)に該当する漢字を、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選んでマークしなさい。

1  
↓  
3

(1) 「トウ」

- ① 頭 ② 到 ③ 当 ④ 統 ⑤ 倒

(2) 「シ」

- ① 支 ② 示 ③ 指 ④ 私 ⑤ 旨

2

(7) 「セイ」

- ① 勢 ② 整 ③ 正 ④ 制 ⑤ 盛

3

問2 傍線番号(3)「体」と同じ読みをする「体」を含む熟語を、次の①～⑤の中から一つ選んでマークしなさい。

4

- ① 生体 ② 同体 ③ 体得 ④ 体制 ⑤ 体裁

問3 傍線番号(4)・(6)の意味として最も適切なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選んでマークしなさい。

5  
・  
6

(4) 顕彰

5

- ① 世に明らかにする
- ② すすめはげます
- ③ 例として示す
- ④ 語り伝える
- ⑤ ほうびを与える

(6) せめぎあう

6

- ① 混じり合う
- ② 争い合う
- ③ 非難し合う
- ④ 交換し合う
- ⑤ 押しのけ合う

問4 傍線番号(5)「他律的な生きかた」とあるが、次のことわざのうち「他律的」なあり方を表すものとして適切でないものを、

次の①～⑤の中から一つ選んでマークしなさい。

7

- ① 一寸の虫にも五分の魂
- ② 朱に交われば赤くなる
- ③ 長いものには巻かれろ
- ④ 寄らば大樹の陰
- ⑤ 虎の威を借る狐

問5 傍線番号(8)「未知」の対義語として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選んでマークしなさい。

8

- ① 予知
- ② 既知
- ③ 故知
- ④ 承知
- ⑤ 旧知

問6 傍線番号(9)「単純に否定し去る」を、次のように四字熟語をまじえた同趣旨の表現に言い換えたい。空欄Aに入る漢字と

して最も適切なものを、後の①～⑤の中から一つ選んでマークしなさい。

9

「二刀A断に切り捨てる」

- ① 無
- ② 直
- ③ 両
- ④ 道
- ⑤ 分

第二問 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(70点)

これからの日本語にとって重要と思われるものは、私の場合、「敬語への自覚」<sup>(10)</sup>である。別に年寄りを尊敬しろということではない。今の日本で「誰を尊敬すべきか」ということになったら、そんな社会的基準はないも同然で、それは個人的な価値基準にゆだねられる。(11)、人と人との間には、親疎の距離が常に存在している。人は生きている限り、「初対面の人」と出会う可能性を常に持っている。どのような背景を持っているか分からない人間と予備知識なしに出会って、それでいきなり親密な関係を成り立たせられるわけでもない。ストーカーや通り魔殺人のようなものが平気で横行してしまうということは、それをずる人間に「他人との距離」という発想がないからで、そのようなつまらない不幸を防ぐためにも、「他人との間の距離」を再確認するべきだろうと思ひ、そのために敬語の存在を自覚すべきだと思ふのである。

A

敬語というものは、社会的な地位——すなわち力関係だけによって発生するものではない。それは、正体の知れない人間との間に距離を設定してしまうものでもある。だから、仲間同士の会話が弾んでいるところに入り込み、丁寧口調で話を続けていれば、「水臭いやつ」とも思われる。積極的に親近感を成り立たせたいのなら、相手と同じ言語を使えばいい。しかし、相手と交わりたくなかったら、終始距離を取って、敬語で通す。「丁寧」はまだ一通りだが、そこに尊敬の度合いが大きくなればなるほど、相手との距離は大きくなる。「あなたとはあまり接近したくない」という意味が、相手の立場を過剰なほどに尊重する敬語だというのが、人間関係を重要視する日本語の素晴らしいパラドックスだ<sup>(12)</sup>と思う。

B

敬語の重要性は、「他者との距離」

言葉というものは、自分とその外側との境に存在するものである。自分の内部だけに留まる<sup>(13)</sup>ものではないし、自分を置き去りにして、外部で独り立ちするものでもない。言葉が自分の内側に傾けば、それはモノログになる。モノログがある種の共通性を獲得し、限られた範囲で流通してしまえば、それは方言になる。方言は、地域的なモノログなのだ。「方言の重要性」が今の時代に言われたりもするのは、自分をより濃厚かつ明確に語るための

(13)

を持った言葉が必要とされているからだ

(14)う。

方言に対する標準語は、「他者との交流」という必要から生まれた言葉である。だからその重点は、自分の外側〓他者にある。他者との関係に比重を置く言語によって自分を語るということは、自分を希薄にすることでもある。だからこそ、自分の所属が明白であるような地域的モノローグ——方言によって、自分をより明確濃厚に語る必然も生まれる。「方言の復権」と言っても、限られた範囲でしか流通しない言葉を、共通語にするわけにもいかない。それぞれに違う共通語を話すというのは、矛盾というものだ。

普通、人は「渋谷界限かむわの若者言葉」を方言の一種だと思わない。方言というのは田舎にあって、都会にあるものではないという思い込みがあるからなのだが、ある限られた範囲内では流通しないという点において、若者言葉は方言の一種である。そして、その流通が限られた範囲内であるからこそ、ここでは (15) がなくなってしまう。

方言を通用させることが出来る安心感と同じものは、実は日本社会のどこにでもある。若者言葉もその一つで、「その言葉を共有させられるからこそ仲間だ」という安心感によって、この特殊な言葉は成り立っている。(16)、その言葉の畏わなも、また同じところにある。「その言葉を共有させられるからこそ友達だ」という安心感によって成り立っている以上、その言葉を使う人間達たちの間に、意志の疎通を図らなければならない。「他者」は存在しないのだ。他者が存在しない以上、言葉はほんざいになる。わざわざ、第三者に対して「説明する」という行為が不要になる。言葉は、その機能の多くを「説明する」というところに割く。すべてが同質の人間達によって成り立っている言葉は、「他者」を欠き、それゆえに「他者への説明」も欠く。つまり、言葉としての機能を大きく劣化させてしまうということである。 (17) C それが、他者の訪れることが稀まれな (18) 村落であるならともかく、大都会の真ん中で「他者への説明」という機能を欠いた言葉が公然と流通しているのは、あまりにも不思議であり、不自然である。なぜ、特殊な方言がそこで必要となるのか。それはつまり、より濃厚かつ明確に自分自身を語りたいという欲求があるからだろう。

方言を使う彼や彼女の背後には、「自分のものではない言語を強要する社会」があるのである。標準語を基本的な日本語とし

て採用してしまった日本社会では、家庭の中の言語が不思議な様相を呈する。標準語というのは、「丁寧」という敬語を必須とする言葉だから、これが家庭を支配してしまうと、家庭に育つ子供と親子の間に距離が生まれる。丁寧というのは、人と人との間の最小限の距離だから、最も人との間に距離を感じなくてすむ親子の間に、歴然と、しかも意識されない距離が生まれるのだ。「○○ちゃん、しまし、ようね」には、歴然と距離をあらわす「丁寧」が入っている。これは、幼児に向かう他者——(20)、教師の言葉である。教育の任務を実感した親は、それを成り立たせる必然によって、子供の間に距離を設定する。この距離を埋めたいからこそ、子供は、距離を感じずにすむ方言を、家の外に求めるのである。

かつての日本人は、方言で育ち、その後に通語をマスターした。D  それが逆になって、存在を主張すべき自己ばかりが肥大するようになった。説明を要される他者の存在が希薄になって、日本語は大きく劣化した。E  それを修復するのなら、敬語という「他者の認識への自覚」が必要だろうと思われるのである。

(橋本治『ひろい世界のかたすみで』による)

(注) モノローグ——演劇で、相手なしに語るせりふ。独白。

問1 傍線番号(10)「敬語への自覚」が、なぜこれからの日本語にとって重要であるか。作者は思っているのか。最も適切なものを、

次の①～⑤の中から一つ選んでマークしなさい。

10

- ① 誰を尊敬すべきかは、個人的な価値基準にゆだねられているから
- ② 初対面の人や正体の知れない人間に対しても使うことができるから
- ③ 予備知識のない他者との間に親密な関係を成り立たせられるから
- ④ 過剰な敬語が使われすぎていると感じているから
- ⑤ 人は、他人との間の距離を再確認するべきだと考えるから

問2 空欄番号(11)・(16)・(20)に入る接続詞の並びとして最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選んで

マークしなさい。

11

- ① たとえば——だから——そして
- ② しかし——そして——つまり
- ③ そして——たとえば——だから
- ④ だから——つまり——しかし
- ⑤ むしろ——しかし——たとえば



問3 傍線番号(12)「日本語の素晴らしいパラドックス」とはどういうことを指しているのか。最も適切なものを、次の①～⑤の

中から一つ選んでマークしなさい。

12

- ① 敬語は、他者との間に距離を設定してしまう言葉でもあるため、他者の立場を尊重すると同時に、皮肉にも他者と親密な関係になることを避けることもできる言葉だということ
- ② 敬語は、他者の立場を尊重する言葉というよりは、むしろ他者との間に距離を設定し、他者から自分を守るための言葉だということ
- ③ 敬語は、「他者との距離」が存在しないような親密な関係をつくるためにはあまり役立たないが、表面的に相手の立場を尊重するためには役立つ言葉であるということ
- ④ 他者との間に距離をとるために敬語を使うと、結局は相手の立場を尊重することになるので、思いがけず他者と親密な関係になれるということ
- ⑤ 他者の立場を過剰なほどに尊重することによって親近感が増すので、敬語は他者との間に距離を取りながらも、他者とよい関係を成り立たせる言葉だということ

問4 空欄番号

一つずつ選んでマークしなさい。

(13)

(15)

13

(18)

15

に入る語として、最も適切なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ

13 (13)

- ① プロセス
- ② クラス
- ③ ジャンル
- ④ フィールド
- ⑤ メディア

14 (15)

- ① 親疎の別
- ② 美醜の差
- ③ 好悪の念
- ④ 適否の境
- ⑤ 長幼の序

15 (18)

- ① 普遍的
- ② 前近代的
- ③ 非文明的
- ④ 封建的
- ⑤ 閉鎖的

問5 傍線番号(14)「方言に対する標準語」とあるが、「方言」と「標準語」に関する説明として最も適切なものを、次の①～⑤

の中から一つ選んでマークしなさい。

16

- ① 方言が限られた範囲で流通する地域的モノローグであるのに対して、標準語は日本社会全体に流通しているモノローグである
- ② 方言には相手との間に距離を取るための敬語が存在しないが、標準語は「丁寧」という敬語を必須とする言葉である
- ③ 方言が濃厚かつ明確に自分自身を語るために必要とされるのに対して、標準語は他者との交流を図るために必要とされる
- ④ かつて方言は家庭の中での言語であったが、現在では家庭の中で標準語が使われているため、方言は家庭の外だけの言語となった
- ⑤ 方言の復権は存在を主張する自己の肥大化をもたらし、標準語の劣化は説明を必要とする他者の存在の希薄化をもたらした

問6 傍線番号(17)「その言葉の罨」とはどういうことか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選んでマ

ークしなさい。

17

- ① 言葉がぞんざいになって、相手を傷つけてしまうこと
- ② すべてが同質の人間達の中で、自分の存在が希薄になってしまうこと
- ③ 他者への説明、という言葉としての機能が大きく劣化してしまうこと
- ④ 大都会の真ん中で、特殊な言葉が公然と流通していること
- ⑤ 濃厚かつ明確に自分自身を語りたいという欲求が満たされなくなること

問7 傍線番号(19)「不思議な様相」とはどういうことか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選んでマ

ークしなさい。

18

- ① 子供が話す若者言葉という特殊な方言は、親には通用しない言葉であるため、親と子の意志の疎通が不十分になり、見えない距離が生じてしまったということ
- ② ぞんざいな若者言葉という方言を好む子供と、丁寧な標準語を話すべきだと考える親との間には、他人同士のように明らかな距離があるということ
- ③ 家庭の中で、子供に対して標準語を使って教育を行う親が多くなり、それを敬遠する子供が親に対して一定の距離を取ろうとする傾向が見られるようになったということ
- ④ 親が家庭の中で、子供に対して標準語という丁寧な言葉を使うようになり、本来、人との距離を最も感じなくてすむはずの親子の間に、距離が生じているということ
- ⑤ かつては子供が親に対して丁寧な言葉を使っていたが、それが逆になってしまったために親子の力関係も逆転し、親子間の距離が不自然な状態になっているということ

問8 文章中の空欄 A ー E のいずれかに「日本の社会も。」という一文が入る。入る箇所として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選んでマークしなさい。

19

- ① A ② B ③ C ④ D ⑤ E

問9 この文章の主題として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選んでマークしなさい。

20

- ① 相手との距離を感じずにすむ方言の復権  
② 敬語という「他者の認識への自覚」の必要性  
③ 家庭内の親子が距離感を認識することの重要性  
④ 共通語を媒介とした「他者との交流」のあり方  
⑤ 「他者への説明」という機能の回復による日本語の再生